

みま 水間の飛鳥・奈良時代の竪穴建物

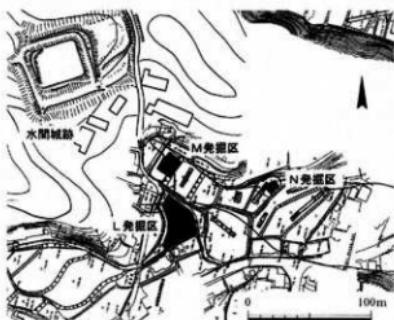
水間遺跡 水間町

水間遺跡は、奈良市東部の大和高原に位置する遺跡です。奈良市では平成11年から県営圃場整備事業に伴う発掘調査を9度にわたって行ない、縄文時代から江戸時代の遺構を多数発見しています。第9次調査では、中世の山城である水間城跡の下方にL～Nの3発掘区を設け、縄文時代の遺物包含層や、飛鳥・奈良・鎌倉～安土桃山時代の遺構を検出しました。ここでは、このうち多数の遺構を検出したL発掘区の概要について紹介します。

調査の概要 L発掘区は、尾根稜線上に造成された水田に位置します。全体的に西から東へ下がる緩傾斜地となっていますが、南側は水田造成時の地下げたため大きく削られました。発掘区北側には小さな谷があり、谷底から奈良時代の遺物が出土しています。また、発掘区南東部には縄文時代の遺物包含層が広がっており、縄文時代早期～前期初頭の遺物が出土しました。

主な検出遺構には、飛鳥・奈良時代の竪穴建物と、鎌倉時代の掘立柱建物、掘立柱列・土坑、溝などがあります。このうち、鎌倉時代の遺構では、掘立柱建物SB03が南北2間、東西2間以上の東西棟建物で、SA01が南北4間、SA02が南北5間の掘立柱列です。また、SK02は東西にやや長い隅丸台形の土坑で、中央東寄りに4つの石を南北に並べた石列がありました。SK02には溝SD02・03が接続しており、SK02に溜まった水を溝SD01に排出していたと考えられます。北側谷部の南岸には東西方向の溝SD04があり、溝の東部には乱雜に積上げられた石組SX01が見つかりました。この石組は谷部から流れ込んだ水流を調節する機能を持っていたと考えられます。

このようにL発掘区では、水間城跡に係わる時期の遺構はありませんでしたが、縄文・飛鳥・奈良・鎌倉時代の人々がこの地を利用していたことが分かりました。なお文献から、水間は奈良時代に東大寺の油（材木をとる山）となり、平安時代



発掘区位置図 (1/4,000)



L発掘区平面図 (1/400)

後半には水田開発が大規模に進んで荘園化したとされますが、今回見つかった飛鳥・奈良の竪穴建物や鎌倉時代の多数の遺構が、こういった事柄に関連しているのかもしれません。

飛鳥・奈良時代の堅穴建物 L発掘区南西部でSB01、東部でSB02の2基の堅穴建物が見つかりました。

SB01 鎌倉時代の溝SD01や後世の水田造成で大きく削平されていますが、南北2.86m以上、東西2.95m、深さ0.1mの方形の堅穴建物と考えられます。東壁から0.2m内側には周壁溝と思われる長さ約1m、幅0.1m、深さ0.02~0.04mの浅い溝があり、また北西隅南側に焼土・炭が混じる箇所があつたことから、北西隅にカマドがあった可能性があります。柱穴や貼床の痕跡は確認できませんでした。

床面からは、4箇所に分かれて土師器・須恵器が出土しており、これらの土器の時期からSB01は7世紀後半に廃棄されたと考えられます。

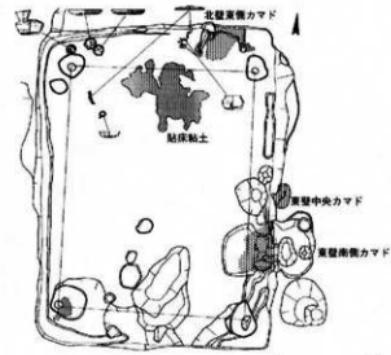
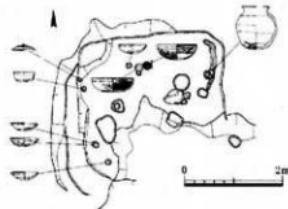
SB02 南北6.55m、東西5.1m、深さ0.4mの長方形の堅穴建物です。四隅に柱穴があり、南北棟建物であったと考えられます。主軸方向はほぼ真北を示し、北に対し約3°西に振れます。周壁溝は、カマド付設箇所で一部途切れながらも全周しますが、南東隅では壁面に沿わず柱穴上を斜めに横切っています。また床面の一部は精緻され、黄橙色粘土で貼床されていました。

カマドは北壁東側と東壁中央・南側の3箇所に設置されていました。このうち、北壁東側カマドは自然に崩れた状態でみつかりましたが、東壁中央・南側カマドは人為的に壊された状態で検出されました。また東壁中央カマド跡には、東壁南側カマド跡と接続する橙色粘土面があり、その残存具合から、当初に構築された東壁中央カマド跡を少し南側に移設し、煙出しを整備したのが東壁南側カマド跡であると考えられます。したがって、3つのカマドは同時に機能したのではなく、東壁中央→東壁南側→北壁東側の順にカマドが構築されたと考えられます。

このようにSB02ではカマドを2度も造り替えている痕跡が認められるので、比較的長期間にわたって人がここに居住していたと思われます。床面及び埋土からは奈良時代の土師器・須恵器が多數出土しており、西側周壁溝内と東壁中央カマド跡埋土から鉄製刀子、床面北東側から鉄製鋤車

が出土しました。これらの出土遺物から、8世紀前半頃にSB02が廃棄されたと考えられます。

このような古代の堅穴建物は、他に大柳生木本遺跡の堅穴建物（7世紀）1棟、水間遺跡（第6次調査）の堅穴建物（8世紀）1棟と、奈良市月ヶ瀬の尾山代遺跡の堅穴建物（8世紀前半）3棟がありますが、奈良県内では非常に貴重な調査例と言えます。文献によれば、水間は東大寺の袖として古くから開発されたことが知られていますが、水間遺跡では、袖に開わると考えられる飛鳥～奈良時代の大型の掘立柱建物や、大量の木屑を含んだ層が見つかっています。尾山代遺跡の堅穴建物も袖に開わる建物と考えられており、こういった堅穴建物が奈良県北東部における袖の一般的な建物だったのかもしれません。なお、水間遺跡第6次調査の堅穴建物は南北2.5m×東西1.9mと小規模で、掘立柱建物に伴う釜屋と考えられていますが、今回の堅穴建物に伴う掘立柱建物はみつかっていません。



SB01(上)・SB02(下)平面図(1/100)